

# 彼の死 ー増田巡査の神格化ー

西村 明

## 増田巡査の殉職

「とても回復の見込みのないことは覚悟しています。高申のコレラは私が背負って行きますから御安心下さい。十分お世話せねばならぬ私が大変御厄介になりました。(1)」

日清戦争が終結した1895(明治28)年、帰還兵士によってもたらされたコレラ(2)は、全国で猛威を奮い、4万人以上の死者を出すほどの大流行となった(3)。この年、さまざまな職歴を経て佐賀県巡査に応募した増田敬太郎は、巡査教習所卒業後まもなく、コレラ流行地であった佐賀県東松浦郡入野村高申(4)への赴任を命じられた。当時「衛生」という観念がほとんど普及していなかったその地で彼は、衛生指導や患者の看病、果ては死体処理に至るまで、コレラの流行を抑えるためにさまざまな献身的な活動を行ったと伝えられている。

そして、赴任3日目にしてみずからもコレラに感染。冒頭の言葉を残して、7月24日の午後3時に息を引き取った。遺体は、翌日、高申沖の小松島で荼毘に付された。遺骨は彼の遺族に引き取られ、郷里の熊本県泗水村に埋葬された。その一部は高申にも分骨され、秋葉神社の境内に埋められた。

この増田巡査は、その死と引き換えに、その後の人々によって神と見なされ、そこにさまざまな意味が付与されることになる。ここでは、その過程を追っていきながら、その背後にある宗教的、歴史的、政治的文脈にも目を配り、近代の日本において、ひとりの特異な死ー「彼の死」が、生者の共同体に与える影響を考えてみることにしたい。

## 増田巡査崇拜の成立

増田巡査の死の2日後、コレラにかかった二人の子どもを看病していた中村幾治の夢枕に、白シャツ姿で剣を抜いた大男が現れ、「余はこの世になき増田敬太郎なるぞ、高申のコレラはわが仇敵にして冥府へ伴い行きたれば安んじて子らの回復を待て、ゆめ看護を怠りそ(けっして看護を怠るな)」とおごそかに言って消えた。翌日、中村は増田巡査の死と遺言のことを聞かされ、自らの夢との一致に驚き、感激して看護を尽くした結果、二人の子どもは回復したという。このような霊夢譚はほかに2件確認されており、これらを伝え聞いた人々の間では、枕上に立ったから増田巡査は神様だということになった(5)。

死後1か月して、高申の村人たちは秋葉神社にある増田巡査の分骨の場所に、「追悼と報恩」の意味を込めて「故佐賀県巡査増田氏碑」を建立している。その碑文には、増田巡査に対する住民の想いとして、以下のようなことが書かれている。

君、名は敬太郎、熊本の人、入野に駐在す。ことし七月高申にコレラ発生し、君は身を挺して撲滅に従い、不幸にして感染す。終に起てず。悲しいかな。実に七月十五日なり。患者またこれより絶ゆ。奇なるかな。冥霊のなおも護る所か。郷民想うておかず。よって石

碑を立てて千歳に伝えんとす。(6)

この段階での、増田巡査に対する宗教的態度は、「われわれ」(共同体)のために自己を犠牲にした者に対する追憶的な崇拜と呼ぶことができるだろう。この場合の追憶には、個々人のレベルでの追慕・感謝の感情もあろうが、共同体レベルでの記憶・記念という政治性も含まれている。現行の共同体の体制を維持・発展することに貢献して亡くなった者を、集団で記憶し記念することは、そのままその共同体の構成員の心理統制の機能を持つことになる。

この石碑が建ったころ、秋葉神社の下に住む伊藤エイという老婆は、神経痛で起居が不自由であったが、増田巡査はあれだけ暴れ狂ったコレラさえ退散させたのだから自分の病気もお祈りすれば聞いてくれるだろうと、朝夕に石碑にお参りをしていた。するとしだいに症状が和らぎ、身体が自由が利くまでに回復したという(7)。これを人々が伝え聞いて、病氣平癒の参拝者が続出したと言われる(8)。また、孫の命が助かったからと増田巡査をありがたく思い、生前もらった名刺を神棚に供えて拝んでいたら、隣近所の人々も拝ませてほしいとやって来るので、庭に名刺を御神体とした小さな礼拝所を建てたという話もある(9)。あるいは、コレラの鎮静化は増田巡査のおかげであり、増田巡査は神様だとして、「増田巡査様」と書いた名刺を作り、神棚に祀ったという話もある(10)。

増田巡査が、タタリを及ぼす話もある。高串の隣村、田野のある者が「世の中に信心結構なれど文明の今日一巡査而も『コレラ』にて死んだ巡査の碑に御願をかけるなど高串の人どもはこの頃どうかなってはいないか」と、冷笑しながら通り過ぎたという。しかし、その年の夏、牛の伝染病が発生して、田野の飼牛が次々に死んだので、その人物が「増田様」を嘲罵したため、神罰が下りたのだらうとの噂が起こってきた。田野の村人が、「大いに恐れ怖きこぞってその罪をわび」たところ、伝染病もたちまち終息したという(11)。

このように、当初は高さ40センチほどの小祠をめぐる崇拜であったが、人伝てに信仰が広まっていき、崇拜対象の方も整備され、本格的な神社の体裁をとるようになっていった。まず、増田巡査の死から1年後、1896(明治29)年の9月には、「各村よりの参詣絶ゆる間もなき有り様となりては、御碑を雨露に曝しまいらせ置くは恐れあり(12)」という理由から、その石碑に瓦葺の拝殿(2間×2間半)が建てられた。また、春秋の皇霊祭の日(春分秋分)を「大祭日」とし、漁を休み、「お籠り」をしたという。この「お籠り」は、もともと秋葉神社の祭りとして、明治初期から行われていたものだが、増田神社のお祭りとしても見なされ、船を使って、多くの参拝者があった。地元の高串、入野村はもとより、唐津、伊万里などの近隣の諸地域や、福岡、長崎などからも参拝者があったとされる。10年後の1905(明治38)年には、社殿を増築し、10坪程度となり、「當浦中(高串区)」によって、日露戦争の「凱旋記念」として、2本の鳥居が建てられた。社殿に近い鳥居には「増田神社」の扁額が、そして次の鳥居には「秋葉神社」の扁額が掲げられた(13)。また1913(大正2)年には、再び増築され、玉垣や狛犬も造られている。

#### 警察・教育関係者らによる増田巡査顕彰

警察の増田巡査崇拜への関わりは、当初積極的なものではなかった。もちろん、警察葬を行ったり、1901(明治34)年には、警察部、同僚警官の芳志で増田巡査の生地泗水村に墓碑を建立したりしているが、それらの行為は他の殉職警官に対しても行われるような類のものである。

警察が、増田巡査崇拝に積極的に関わりだすのは、大正の末からである。その最初のものは、増田神社の社格獲得運動である。1923(大正12)年、増田巡査を高申に派遣した音成源三郎は、神社の運営と信仰者の名誉のために、無格社であった増田神社に「村社」等の社格を獲得するための運動を起こしている。彼は、当時高申に在住の漢学者島常也に依頼して、増田神社の縁起書『増田神社由来記』を起草させ、当時の内務大臣若槻礼次郎に申請したが、社格は認定されなかった。

同じ頃、唐津警察署次席警部補だった横尾佐六は、当時の山口徳一郎唐津署長に誘われ、増田神社の祭礼に出かけた。一巡査のために神社が建てられ、多くの参拝者や祭りの賑わいにショックを受けたそうである。しかし同時に、このとき彼は「増田巡査の偉業を知り、警察精神の昂揚上最適の事績なりと信じその顕彰に一生を捧げることを決意」している<sup>(14)</sup>。

その後、横尾は、佐賀県出身の連修が、佐賀県警察部長として1929(昭和4)年に赴任してくると、連に増田巡査の事例を紹介している。翌1930(昭和5)年の『警察協会雑誌』9月号、10月号には、松浦玄一郎という唐津出身の人物の手による、増田巡査を題材にした戯曲「松田神社由来記」が発表されている。また、1931(昭和6)年8月号には、連が増田神社を訪れた際の写真が載せられ、全国の警察官に増田神社の存在を知らしめた。同年連は、横尾に熊本出張の折、増田の生家を訪ねさせているが、その取材の成果も含めて行った警察練習所での訓話(7月15日)をまとめ、パンフレット『嗚呼警神増田巡査—増田神社の由来』を出版し、全県下に配付している。その中で連は、「我等警察官の魂の反省をして見たい」と述べ、増田巡査が神とされるのは、「偉大なる精神」を発揮し、「偉大なる人格の完成即ち神」を顕わしたから<sup>(15)</sup>、「日本精神の権化であり又警察精神を完全に発揮して警察官の典型的模範を世に示されたからで」あるとしている<sup>(16)</sup>。

この連の言葉に登場する「日本精神」「警察精神」とは何であろうか？

平重道によれば、「日本精神」という言葉は、大正末に安岡正篤や大川周明らによって使われ始めたようである。1924(大正13)年、安岡は『日本精神の研究』を、大川は『日本精神研究・第一、横井小楠の思想及信仰』をそれぞれ刊行している。彼らの「日本精神論」は、大正期の「国性論」「国民道徳論」の流れを受けたもので、第一次大戦後の日本の思想界に「横溢」していた民本主義、唯物主義、社会主義などの思想勢力に対する、強烈な反発として出発している。それは、同時期の政府側の対応である、「国民精神作興の詔書」(大正12年)と共鳴しあっていると言えよう。具体的には、外来の物質文明に対し、日本精神を基本とした精神文明の復興を目標とし、さらには純真で自主的な人格の体現を志向するものであった。つまり、それは国家主義、民族主義の思想的立場の探求であったのである。安岡や大川の「日本精神論」は、過去の偉人の生涯や思想に注目し、日本人の体現すべき価値を具現した模範として、具体的な人物像を提示することによって、行動を促そうとする政治的・実践的意図を持つものであった。「日本精神論」は、その後、1929、30(昭和4、5)年から勃興期に入り、1935(昭和10)年前後に全盛を極めたが、その3、4年後には沈滞期に入っていった。それは、時代状況が、精神運動から、政治経済的改編の段階に入り、全体主義・国家社会主義的理論が「皇道主義」「日本主義」の名のもとに指導的役割を果たすようになったからであった<sup>(17)</sup>。

他方、先の横尾の決意の中にも出てくる「警察精神」は、警察の増田巡査顕彰を見る上で、ひとつのキーワードとなる。安岡や大川が「日本精神」を唱え始めた1924(大正13)年、松井茂は『警察の根本問題』において「警察精神」という言葉を用いている。この当時の『警察協会雑誌』

の掲載論文を見ると、これ以前には「警察精神」という言葉は登場していない。翌年の1925(大正14)年頃から登場し、「日本精神」と同じく1935(昭和10)年前後に多く論ぜられ、その後もやはり同様に、1939(昭和14)年頃から徐々に「皇道主義」「皇道精神」に取って代わられている。「警察精神」の主張は、これらの時期の中でも特に、1931(昭和6)年の満州事変に伴う軍国主義主張の高まりとともに強くなっている。そこでは「日本精神」同様、唯物主義・社会主義への対抗とその撲滅が常に念頭に置かれていることも注意すべきことがらである。連のテキストにもその点に触れている箇所がある。「唯物思想がわが社会に弥漫するや、社会の先覚者たるべき警察官の中に、唯物思想に気触れんとする者ありと聞き及んでは遺憾に堪えないのであります。(18)」これは明治後半頃から起ってきた、警察内部での賃上げストライキを指して言っているのであろう。1919(大正8)年には佐賀警察署でも同様のストライキが起こっており、翌年政府は巡査給与令を改め、給与の2倍近い増額を行うと同時に、精神的統制も強化している(19)。連が訓話を行った1931(昭和6)年の段階でも、警察内においてそのような社会思想の影響が存在し、精神統制のために増田巡査の事例が用いられたのだと理解することができる。

その後も、横尾が中心になって、顕彰を進めていくが、彼はまず、1932(昭和7)年に演劇の脚本『噫増田巡査大明神』を書き、裁判劇で定評のあった東京の川村金次一座を呼び、県下各地の劇場や炭坑などで公演した。劇中場面の絵はがき、浪曲やそのレコードなど、メディアを使った宣伝がなされ、新聞でもたびたび紹介された。劇興業の目的は、一つに佐賀県防犯協会の資金獲得のためであり、もう一つは増田巡査の精神を県下全般で高揚させるためであったとされる。1936(昭和11)年には、唐津警察署長になっていた横尾が音頭をとり、劇の興業利益に、佐賀県全警察官からの寄付、全国からの寄付を集めて、社殿を改築した。その際、もともとあった秋葉神社の方を合祀している。また、1939(昭和14)年には、横尾は吉江佐賀県警察部長とともに防犯協会の設立を果たしている。

このような劇興業、社殿改築、防犯協会の設立にも見過ごすことができない背景が存在している。

劇興業を初めとする、一連の「増田巡査キャンペーン」は、当時の「警察の民衆化と民衆の警察化」の方針という文脈の中で理解することができる。大日方純夫によれば、「警察活動の基盤を民衆のなかにひろげ、民衆の同意と協賛を調達することによって秩序の維持をはかろうとして、警察は積極的に民衆に対して宣伝する姿勢を取りはじめ」ている。例えば、交通安全のキャンペーンや安全週間・災害防止週間のキャンペーンなどが大正後期から始まり、映画の上映や展覧会などを通して警察活動・秩序維持の重要性をアピールしていった(20)。このような「警察の民衆化と民衆の警察化」の方針には1905(明治38)年の日比谷焼き打ち事件を機に起った警察に対する非難を受け止め、民衆寄りの路線を取るとともに、それによって、民衆の協力のもとに秩序を強化していこうとする狙いが見られる。この考え方はその後も継承された。横尾らが推し進めた防犯協会の設立も、まさに民衆の警察化を促進させるものであると言える。

一方で社殿の改築には、先の「警察精神」が関係している。増田神社の社殿改築の前後、全国各県の警察において殉職警察官・消防官を合祀する神社建設の動きが起こっている。例えば、1935(昭和10)年の、警察講習所「青葉神社」、静岡県「彰徳神社」、1936年の鳥取県「城南神社」、1937年の徳島県「徳島神社」などである。『警察協会雑誌』の「雑報」によれば、これらはいず

れも「敬神の念」を深らしめ、「警察精神」を「作興」させる目的のために建てられている。連は、増田神社を「警察精神の本殿」と捉えているが<sup>(21)</sup>、横尾による社殿改築の背景として、このような全国的な警察の動きがあったことは確認しておくべきことがらである。

劇や社殿改築のほかにもまた、さまざまな顕彰の動きが見られる。新たな社殿が落成した1937(昭和12)年には、熊本県巡査教習所の生徒が、修学旅行を兼ねて参拝に訪れ、翌年からは佐賀県巡査教習所生徒の団体参拝が始まった<sup>(22)</sup>。1939(昭和14)年には2回目の社格獲得運動を行い、『大毎〔大阪毎日〕小学生新聞』に取り上げられた<sup>(23)</sup>。しかし、このときも社格獲得には失敗している。翌1940(昭和15)年には皇紀2600年記念として佐賀県防犯報国連合会から「巡査大明神」の扁額を掲げた3つ目の鳥居が寄進されている。さらに、3度目の社格獲得運動が1943(昭和18)年頃行われたが、「軍神ばやりの時節<sup>(24)</sup>」柄、これも失敗に終わった。そのため、横尾の神社運営方針は、警察官からの1円募金などの方策によって賄おうという方向に向かっている。戦後には、横尾は、高申区民からなる増田神社奉賛会を組織し、初代会長を務めている<sup>(25)</sup>。

その後も増田巡査の「事績」は、警察官の交友誌などで、たびたび取り上げられ、現在増田神社の拝殿には、県警本部長らの揮毫による「神人合一」や「仁愛挺身」などの額が飾られている。

他方、教育関係者も増田巡査の顕彰に関わっている。1928(昭和3)年、増田神社の近くにある田野小学校の校長、古川政次郎は「増田神社由来記」を書き、文部省修身教科書資料に当選した<sup>(26)</sup>。伊藤直治が1929(昭和4)年に編纂した『入野村郷土史の研究』の中にも、増田神社が登場している。そこでは、その由緒について、他の寺社の十倍以上のスペースを割いて述べてられおり、増田巡査の功績と、増田神社への人々の崇敬の深さが記されている。また、唐津市・東松浦郡教育会は、「郷土の先覚者に対して、敬虔の念を捧げその霊を慰め、かつその業績を顕彰して徳沢を讀えよう<sup>(27)</sup>」との意図から、1932(昭和7)年第1回先覚者顕彰式典を行った<sup>(28)</sup>。その126名の「先覚者」の中に増田巡査の名前もある<sup>(29)</sup>。他方で、1933(昭和8)年、佐賀県学務部学務課は、佐賀県郷土教育調査会を発足させ、その活動の成果として、2年後の1935(昭和10)年6月『佐賀県郷土教育資料集』を刊行した<sup>(30)</sup>。第四編に「正義の念強く、犠牲的精神に富む」という見出しで、日本赤十字社の創立者佐野常民や、愛国婦人会の創立者奥村五百子等と並んで、「増田巡査」が挙げられている。

以上の教育関係者の顕彰の動きは、「郷土教育運動」の文脈において理解することができる。昭和に入ると、文部省を中心に、「郷土教育運動」が推進された。それは、郷土愛を国家愛の基盤として捉えるものであった。例えば『佐賀県郷土教育資料集』は、先の文部省の方針と同じく、「真の愛郷心は実に真の愛国心」という考えのもとに、「郷土意識の培養と日本精神の発揚」とを目的としていた<sup>(31)</sup>。ここから、警察界において「警察精神」という形をとった「日本精神論」が、教育界では「郷土教育」の形で展開されていたことが理解できる。つまり、昭和初年に展開された増田巡査顕彰の動きは、警察界も、教育界も、「日本精神論」の枠組みの中で連動していたと結論づけることができよう。

増田巡査顕彰の動きは、第二次大戦後、増田巡査の生地、熊本県泗水にも興ってくる。そのきっかけは、内田守という人物が熱心に取り組んでいた「公民館運動」における青年教育においてであった。内田守は、敗戦直前まで国立ライ療養所医官としてハンセン病患者の治療にあたったが、病氣療養のため故郷泗水に戻り、個人医院を開いていた<sup>(32)</sup>。彼は、民生委員、学校医

等の学校教育や社会教育の職を引き受けていたが、地元永部落の公民館設置のためにも奔走し、公民館長の職を務めている。「敗戦となり国家的、軍隊的の統制が失われると、あたかも荒野に放たれた野獣の如く、人間としての教養や、社会人として守るべき公德心は全く地を払ったかの感があった<sup>(33)</sup>」という現状認識のもとで、「公民館運動」を行っていた内田は、小学校の恩師宝田茂から増田巡査の事績を知らされ、戦後の精神的荒廃の中で青年達を指導していくのにより手本になると考えた。そこで、1947(昭和 22)年永公民館の落成式に際して、演劇脚本『増田神社由来記』を書き、青年団に演じさせた。彼は、「増田巡査劇の精神的バックボーン」には、「軍国精神ではない尊い人類愛」があると見なしている<sup>(34)</sup>。彼は、東郷神社や広瀬神社などの「軍神」を国家権力を背景に生れ出たもので、「平和日本の守護神」としてふさわしくないとし、それに対し、「増田巡査は警官という聖職にあって、義務付けられた職責ではあったが、防疫という型の変わった場合の奉仕であり、捨て身の活動<sup>(35)</sup>」であるとして、増田巡査と軍神との差異化を図っている。さらに増田巡査崇拜は「全く多くの〈民衆〉の心から発芽した信仰であり、増田巡査こそ萬人が手本とすべきヒューマンイズムの極致である<sup>(36)</sup>」と述べ、「人類愛の権化」として増田巡査を見なしている<sup>(37)</sup>。

このように内田が増田巡査を「人類愛の権化」と見なし、軍神との差異を強調する背景には、ハンセン病患者への短歌指導等にみられるような自身のヒューマンスティックな思想も存在するが、他方でGHQの存在も意識されている。内田は、「平和日本の再出発は、増田精神をしっかりと握りしめることだと感じた。この人類愛の権化ともいべき増田巡査の事績ならば、連合国の人たちに聞かせても、決して恥ずかしくないと思った。戦争好きで非常に殺伐だと、外国人から怖れられていた日本人の中にも、こんなにも人類愛と責任感の強い人が居たのかと、日本人を見直してくれると思った。<sup>(38)</sup>」と述べており、当時の内田の活動は、増田神社が、GHQの推進する「神道指令」には当てはまらないということを経験し、GHQにアピールしていたものだと考えることができる。1945(昭和 20)年に出された「神道指令(国家神道、神社神道に対する政府の保証、支援、保全、監督、並に弘布の廃止に関する件)」によって、靖国神社や各地の護国神社、忠魂碑・忠霊塔などは存亡の危機に立たされた。増田神社の場合、軍事関係者を祀ったものではなかったため、神社の存亡が問題になった形跡はなく、もともと無格社であったため、国および地方公共団体による供出金や神饌幣帛料の廃止の影響もなかった。もし、GHQが問題視するとすれば、公民館という公共施設において、増田巡査劇を公演することが、「軍国主義乃至過激な国家主義的イデオロギー」の鼓吹や宣伝になるかどうかということであろう。内田は、増田巡査の事例について「敗戦の虚脱感から再起するには、最適のヒューマンイズム精神であり、また進駐軍も公衆衛生精神の高揚であれば喜んで受け入れてくれると思った<sup>(39)</sup>」とも述べており、この点を意識していたことが見て取れる。

公民館での増田巡査劇の公演以降の活動について見ると、1948(昭和 23)年には、内田は、宝田茂らと、「増田精神顕彰会」を組織している。1962(昭和 37)年には、増田巡査の生地に顕彰碑も建てられた。その後も、内田を中心に、熊本における増田巡査の事例の紹介は続けられていった<sup>(40)</sup>。

## 顕彰開始後の信仰

当初は、増田巡査の功績や遺言にみられる霊神信仰の性格によって「コレラの神」「病気の神」となり、流行的な信仰の対象であった「増田神社」も、昭和初期を中心として展開された増田巡査の人物像の顕彰活動によって、「警神」「巡査大明神」へとその性格を変えていった。しかし、民俗的な信仰の側面が消えてしまったわけではない。

例えば、第二次大戦中、とある戦地でアメーバー赤痢が流行した際、ある患者が増田神社の奉納旗の布を焼いた灰を飲んで熱が下り、軍医も不思議がって他の患者に与えて全員快方に向かったという話が残っている<sup>(41)</sup>。

飲まないまでも、拝殿の幕を引きちぎって「お守り」にするということは、よく行われていたようである。田中丸勝彦によれば、その頃は盛夏の時に増田神社参りをする風習があり、その際、競って拝殿の幕を引きちぎって持ち帰り、疫病予防のお守りにしていたようである<sup>(42)</sup>。

また、内田守は、昭和11年の改築の際、増田巡査の姪増田衣恵が奉納した、紫の絹地の引幕に言及し、「平生も引いて置くと参拝者が『お守り』代りに引き割いて行く怖れがあるので、祭礼用に大切にされた<sup>(43)</sup>」と述べており、ここからも「お守り」の風習が存在したことがうかがえる<sup>(44)</sup>。

そのほかにも、現在は見られないが、夏の例祭の時、境内に水甕が置かれ、その水を「お水」とか「神水」と呼んで、体につける風習も存在しているようである。夏の例祭が始まった1951(昭和26)年に、増田神社を訪れ、「増田神社参拝記」を書いた佐賀県警察官三木凡平は、「『神水』と云ってこの水を一杯いただき身体につければ、絶対に伝染病にはかからないと云う。これは迷信のようであるが、この辺りの人には笑えない大事な事業として、今日尚続けられているのである<sup>(45)</sup>」と述べている。このように、民俗的信仰は「迷信」と認識されながらも容認され<sup>(46)</sup>、存続していったのである。例えば、1963(昭和38)年の新聞記事には、次のようなものが見られる。

「大もて コレラ退散の神社 防疫に殉職した警官 連日、食品業者らでにぎわい」

ことしもすでに香港など東南ア各地でコレラが発生、入港船の多い北九州各港は“水際でのコレラ撃退”の態勢を固めているが、日本でただひとつといわれるコレラ退散の神さま、佐賀県東松浦郡肥前町高申の増田神社には海水浴場や生鮮食料品業者などがどっと参拝におしかけて「ことしはコレラ騒ぎが起きませんように…」と懸命にお祈りしている。・・・[ここで増田神社の由来の紹介—注西村]・・・この神社のいわれは昨年のコレラ禍で再びクローズアップされ、昨年大打撃をうけた海水浴場の売店業者や食料品業者などが各地から参拝し「ノーモア・コレラ」を祈っているわけ。<sup>(47)</sup>

この記事からわかるように、このとき増田神社に集まった注目は、顕彰活動による「犠牲的精神の発揮者」という増田巡査像に対してではなく、コレラの流行を防ぐ「コレラの神」として民俗的信仰において現れる増田巡査像に対してである。このように顕彰開始後も民俗的信仰は断続的にハヤリースタリをくり返しながら、たびたび再燃しており、顕彰活動と位相を異にして併存していた。

## 彼の死

増田巡査の死後展開された以上のような神格化の過程について、若干の考察を加えてこの論を締めくくろうと思う。その過程を一言で言うならば、増田巡査の死に対する態度が、「汝の死」から複数の「彼の死」へと変化した過程であると言うことができよう<sup>(48)</sup>。すなわち、「佐賀県巡査増田氏碑」の建立にみられるような、高串の住民らによる哀惜、追悼、報恩などの感情としての「汝の死」が、まず、伊藤エイという老婆の解釈に始まるような流行神的信仰へと拡大し、高串のコレラ禍とは直接関係のないコレラ一般、病氣一般の御利益を求める人々によって抱かれる死霊崇拜的な「彼の死」へとなる。そして、警察や教育関係者らの顕彰において犠牲的精神の模範像として称揚されるような近代ナショナリズム的「彼の死」にもなった。さらには、内田守が人類愛の権化として敗戦後の青年教育に役立てようとした戦後民主主義のヒューマンズ的「彼の死」としても登場することになったのである。

このように、増田巡査の死は、二人称的な死から三人称的な死へと変換されることによって、地域的限定性がなくなり、増田巡査の功績に直接的には関係のない人々にも受け入れ可能なものとなる。その際、その死の意味付けは、解釈者の姿勢によってさまざまなものとなっているが、それは増田巡査の死のベクトルが、自己犠牲的利他行為という方向を指し、それがそれぞれの解釈基盤（民俗宗教、近代ナショナリズム、戦後民主主義的ヒューマンズ等）のうちで、それぞれのイメージの像を結んだのだと言うことができよう。

このような死の三人称的性格を、ミッシュル・セールにならって「ジョーカー」的と表現することも可能であるかもしれない。「それはもはや「aはaである」とはいわなくなり、入れ替えをして、「aはbである」といい始める。・・・彼は立ち去るのだが、しかしつねにここにいる。あなた方は彼を投げ捨てたのだが、彼はあなた方の物語のなかに存在している。・・・ジョーカーは分岐点にあって、自分の保証するさまざまな価値を合流させることによって分岐を可能なものとする。ジョーカーはすでにいわれたことであると同時に、これからいわれようとしていることである。彼は結合の複雑性に応じて、二つの価値、三つの価値、あるいはいくつもの価値をもつ。<sup>(49)</sup>」このようなセールの表現を、増田巡査の死に当てはめてみると、以下のように言えよう。彼はもはや「増田巡査」ではなく、「コレラの神」、「病気の神」、「日本精神の権化」、「警察精神を完全に発揮」した「警察官の典型的模範」、「巡査大明神」、「警神」、「犠牲的精神」の発揮者、「人類愛の権化」などである。彼自身は既に亡くなり「立ち去る」のだが、しかし増田神社の祭神として「つねにここにいる」。彼の事績は「すでにいわれたこと」であると同時に、民俗的信仰やそれぞれの顕彰に際して「これからいわれようとしていること」、つまり、新たなイメージの解釈を付与され、それらの「いくつもの価値を持つ」のである<sup>(50)</sup>。

ひとりの死をめぐるさまざまな展開される解釈が併存しているというこのような状況に対しては、ポリフォニック（多声的）という形容を施したくなるが、しかしながら、そのような複数の声の陰には、かき消された声があるということにも注意を向けねばならないであろう。

例えば、顕彰者のテキストには、増田神社の周辺に数多く存在した炭坑の労働者たちの声は響いていない。増田神社の周辺地域には、入野、有浦、大鶴などの炭鉱があった。隣村の北波多村では1917年（大正6）年に芳谷炭鉱争議が起っており、このような社会運動や炭鉱暴動が、警察の顕彰活動の背景にあることは、先に見た「警察精神」作興などの動きから推測できる。また、



このような炭鉱では、昭和15年頃から朝鮮人労働者が3割ほどを占めるようになってきているが、彼らについては、顕彰テキストなどでは、声どころかその影も認めることが困難である<sup>(51)</sup>。唯一、安本末子の『にあんちゃん』によって、増田神社の背後に、これらの人々の存在を確認することができる。1958(昭和33)年に出版されミリオンセラーになり、後に今村昌平により映画化されたこの作品は、大鶴鉱業所の朝鮮人労働者の家庭で困難な生活を送る、10才の少女の日記集である。この中に増田神社のお祭りの話が出ているが、それは顕彰によって広められた増田巡査の伝記物語の姿そのままであり、兄から聞いたというこの安本の増田神社理解は、おそらく学校経由のものであろう<sup>(52)</sup>。したがって、安本のテキストからは、炭鉱労働者の存在は見えてくるものの、その声、特に警察による顕彰が活発だった昭和初期の彼らの声がどのようなものであるかは、全く分からない。

さらには、当然のことではあるのだが、増田敬太郎本人の声は響かないのである。もちろん彼の生前の声は、冒頭に記した遺言をはじめとして記憶・記録されているものの、それぞれの解釈に対しては、もはや彼の応答は許されておらず、「死人に口なし」の状態である。われわれは、もはや応答なき者となったこのような死者たちに対して、彼らの後に生き残った者としてどのように向きあうべきかという倫理的問題を主体的に引き受けねばならないと同時に、そのような死者に対する生者（の共同体）の態度を詳細に分析することで、生者の共同体にとって死者がどういうものとして存在し、機能しているのかということを考えていかねばならないであろう。これは歴史的に古い、もはや何の新しさもないように見える問題であるようにみえる。例えば、祖先崇拜の諸研究は、村落共同体における「祖先」という死者の生者に対する影響、機能を解明してきた。しかし、ここに先ほどの「彼の死」という条件を加えるとどうであろうか。「祖先」のように血縁的・地縁的なつながりが無い者の死が大きな問題となるのは、コレラなどの伝染病や地震などの災害、あるいは戦争などの危機的状況で、多くの死者が出た場合が考えられる。慰霊碑や供養塔などが建てられ、直接の関係者以外の人々もさまざまな関心から関わってくるような状況というのは、特に近代になって多く見受けられるものである<sup>(53)</sup>。近代における「彼の死」、これはいまだ十分な議論が尽くされていない、緊急を要する課題である<sup>(54)</sup>。

## 註

- (1) 島 1926 「御由緒の二」
- (2) コレラ（アジアコレラ）は、コンマバチルスを病原菌とする伝染病で、経口感染によって広がる。その症状は激しく変化し、最悪の場合、発病して一両日中に死にいたる。本来インドのベンガル地方の風土病であったが、19世紀初頭から、近代化による人や物の大量移動によって、世界中に広まった。日本では1822(文政5)年をはじめとして、安政、文久年間に大流行をくり返した。明治期には1877(明治10)年から1895(明治28)年の間、2、3年ごとに死者1万人を越す大流行をくり返している。「コレラは衛生の母なり」という言葉があるように、明治政府は、コレラの流行をきっかけに、国家規模での衛生行政に取り組み、警察を窓口として衛生指導を行った。そこには同時に、一人の病気が病気の蔓延につながり、反対に一人の健康が国家の富強につながるという身体レベルでの民衆の国民化の推進の意図が見られる。（阿部 1996）他方で、民衆レベルでは、明治新政府の方針に違和感を感じて諸政策に対する武力的抵抗を行った新政反対一揆のひとつとして、コレラ一揆も各地で起こり、警察や官吏への暴行、疫病送りや死体処理に伴う地域間の衝突などが見られた。
- (3) 世界的に見ると、第5次コレラ・パンデミーの最中であつた。兵士達の船が帰港する門司では、3

月の段階で、患者17名中死亡者が11名にのぼっており、コレラ発生の条件がそろそろ夏に向けて、コレラの流行が憂慮された。結果的には、この年のコレラ流行は、全国統計で患者数55,144名、死亡者数40,154名にのぼり、明治期の大流行の中で、3番目に大きな流行となった。佐賀県では、4月18日に訓令159号「征清軍凱旋に対処・摂生・清潔・消毒・隔離等達す」が出され、続いて5月1日には、訓令187号「船舶検査開始（唐津・呼子・伊万里各署）」が出されている。しかしながら、近代日本としての初の対外戦争であり、しかも清という大国を相手として勝利を収めたことによって、ナショナリズムの気運が高まる中、戦勝祝賀会や凱旋兵士の歓迎会等が県内各所で催され、それらの場所での、集団飲食や生水飲水を通して、6月には佐賀県にもコレラ患者が発生した。そして、7月20日の段階では、患者数66名、死亡者数40名を数えている。とくに東松浦郡は、患者数30名、死亡者数19名と、7郡ある県内の総計のほぼ半数を占めるほどの流行地となった。それは、東松浦郡西海岸の漁村には、県や警察署の指導が十分ではなく、衛生思想の遅れが目立っていたからであるとされている。

- (4) 入野村高串（現肥前町高串）は、東松浦郡の西海岸、納所半島の南部に位置し、日比水道を挟んで長崎の福島、鷹島と相対する集落であり、唐津市の西方、伊万里市のほぼ北方にあたる。明治21年の県の統計書では、人口397人、漁家数120戸で、専業兼業合わせると、ほとんどの者が漁業に従事している。当時は、和船（槽漕帆走）を使った、壱岐・対馬沖でのイカ操業が行われていた。また、高串港からは、近隣の狸谷、杉谷、阿漕、瓜ヶ坂の各炭鉱から手掘りされた石炭が、搬出されていた。集落内には、弘法大師空海が、遣唐使船に乗り込んだ場所とされる「渡錫の鼻」もある。このように、外に対して開かれた環境ゆえ、コレラの侵入も容易であったことが推測される。
- (5) 田中丸 1992 p.7-8
- (6) 実際は、漢文体で書かれている。「君名敬太郎熊本人駐在入野今歳七月於當高串申列拉發生君挺身從於撲滅不幸感染焉遂不起悲哉實七月十五日也患者亦自是絕奇哉冥靈之猶所護乎鄉民想而不措立碑以傳千歲焉」【佐賀県警察史】上 p.846
- (7) この老婆による解釈は、増田巡査を御利益をもたらすことのできる神と見なし、しかも、その機能をコレラに限らず病氣一般に拡大させたことで、それまでの石碑に込められた道徳的な信仰のレベルに、流行神的な死霊崇拜のレベルを付け加え、その後の信仰の拡大という結果をもたらしたと言える。
- (8) 島 1926 「御由緒の三」、【佐賀県警察史】上 p.851-2
- (9) 内田 1966 p.54
- (10) 【佐賀県警察史】上 p.24
- (11) 島 1926 「御由緒の三」
- (12) 同上 「御由緒の三」
- (13) この「増田神社」という呼称が、いつの時点で発生したのかについては確認できないが、少なくとも、この鳥居ができた頃には、増田巡査に対する崇拜は「増田神社」信仰として展開されていることがこの扁額からわかる。
- (14) 内田 1966 p.180
- (15) 連 1931 p.1-2
- (16) 同上 p.12
- (17) 平 1965
- (18) 連 1931 p.19
- (19) 大日方 1993 p.118-119
- (20) 同上 p.127
- (21) 連 1931 p.13

- (22) 戦争によりいったん中断したものの、戦後も佐賀県警察学校の団体参拝は続けられている。1998(平成10)年度の夏の例祭では、警察学校の生徒が2基の神輿を境内から漁港の広場まで担いでいた。
- (23) 1939(昭和14)年9月15日付「警察官の誉、コレラに殉じた巡査大明神さま」
- (24) 内田 1966 p.75
- (25) 奉賛会組織は、横尾の死後いったん無くなったが、西沢誠佐賀県議員により再興され(正確な年代は不詳)、現在は高申区長の岩本平三郎が第三代の会長を務めている。
- (26) 結果的には教科書に載ることはなかった。
- (27) 内田 1966 p.85 「東松浦郡郷土資料集」(1960 東松浦郡教育会)からの引用。
- (28) 「郷土先覚者小伝」表紙裏頁 また、1940(昭和15)年には唐津神社の境内に先覚者顕彰碑を建設して大祭典を催している。
- (29) それに先だって、1930(昭和5)年頃唐津新聞主催による景勝地選定コンクール「松浦十景」に選ばれているが、同新聞は、「三十五勝候補地に列するや、同村の船岡圓太郎氏を始め高申区民は、我等の崇拜せる犠牲者の増田神社の爲にとて、大奮戦を続け、一方連警察部長を始め県下警察員が果敢応援をなし、栄ある十景に入選したものである。」(内田 1966 p.72)と伝えており、地元民と警察による強力な働きかけがあったことがうかがえる。また、1938, 9(昭和13, 4)年頃にも、同新聞主催で、一般投票による東松浦郡内の15人の偉人・先覚者が「十傑五秀」として選定されたが、増田巡査は「五秀」のうちに数えられている。(内田 1966 p.83)
- (30) 「佐賀県教育史」第5巻 p.360-、「日本新教育百年史」第8巻 p.98-99
- (31) 「日本新教育百年史」第8巻
- (32) 1900(明治33)年生れ。熊本医学専門学校卒業後、1946(昭和21)年まで国立ライ療養所医官として患者の治療とその精神解放のため短歌指導にあっていた。病気により退職後、故郷で医師となるかたわら、公民館長や社会教育等に従事している。1950(昭和25)年には熊本短期大学の講師になり、その後同校教授、同校付属の社会福祉研究所初代所長になっている。1973(昭和48)年同校定年退職の後、佐賀県の西九州大学教授に就任、翌年社会福祉学科の開設とともに科長となる。内田守人という名で歌人としても活動し、多くの歌集の出版、編集にあたり、「人間的」という短歌グループを主宰した。(内田 1966), (「熊本県大百科事典」)
- (33) 内田 1977 p.5
- (34) 内田 1966 p.98
- (35) 同上 p.93-94
- (36) 同上 p.139
- (37) 内田は、また「恰度キリストのイスラエルに於ける殉教と極めて類似しており」と、増田の活動を、イエス・キリストのそれと類比的に捉えている。(同上 p.166)
- (38) 同上 p.97
- (39) 内田 1972 p.1
- (40) 荒木精之「熊本県人物誌」(1959)、内田「身を焦がせし先人たち」(「熊本県社会事業史稿」1965)、熊本県教育委員会「道徳教育資料集」(1966)など
- (41) 内田 1966 p.163-164
- (42) 田中丸 1992 p.5
- (43) 内田 1966 p.89, 123
- (44) 幕がたびたび引きちぎられたため、後に八千代旅館(増田巡査の終焉の場所)において、「お守り」が販売されるようになった。(内田 1966 p.122) 現在では、夏の例祭の時に、増田神社奉賛会によって作られた「お守り」を、希望者に分けるという形式になっている。(岩本平三郎氏からの聞き書きによる)

- (45) 三木 1951 p.29, 内田 1966 p.143-144 にも所収
- (46) 「迷信撲滅」を目的とした『迷信の犯罪打診』を1934(昭和9)年に出した後藤道雄は、「伝染病の大流行を来す者は増田神社の創立委員である。と言われるのが心外なら創立委員たりしお歴々は、こんな愚かな迷信説の撲滅に努力していただきたい」と顕彰者の容認の姿勢を強く非難している。(後藤 1934 p.129-130) また、内田守によれば、「終戦後、公安委員会が出来て、横尾佐六氏が増田神社の信仰に就いて話していたら公安委員長から迷信がかってはいないかと云われた事がある」ようである。(内田 1966 p.122-123) このような容認の姿勢は、増田巡査の顕彰が、地域に根ざしたのものとして存在するためには不可避的なものであったのであろう。この点に関しては、(西村 1998 p.84) 参照。
- (47) 『フクニチ新聞』1963(昭和38)年7月9日付(『佐賀県の祭』1996 所収)
- (48) 「汝の死」という表現は、フィリップ・アリエスに拠っている(アリエス 1983)。ただし、彼の用語は、西欧の歴史的な文脈の中で使われているため、当然本論文での意味合いとは異なっている。本論文での分析用語としての「汝の死」「彼の死」という用法は、むしろ脇本平也の「己の死」「汝の死」「社会的成員の死」という比較宗教学的な分類に多くを負っている。(脇本 1997)
- (49) セール 1987
- (50) また、こうした増田巡査の死の三人称的性格、ジョーカー的性格は、ルネ・ジラルドや今村仁司らのスケープゴート論やマルクスの『資本論』における価値形態論の貨幣形態の性格を容易に想像させるが、死とそれらとの関連については、紙面の関係上別の機会に論じることにした。
- (51) 井手 1972
- (52) 「(7月22日 水曜日 晴のち曇) ドンドンと、たいこの音がしたので、出てみると、なにかしらないが、ぎょうれつして、映画館の方へ向かっていました。光子さんとふたりで、行ってみました。ぎょうれつは高串の増田神社の夏まつりのせんでんでした。増田神社がどうしてできたのかは、いまから、五十年か六十年ぐらい前の話です。高串に、せきりのようなひどいでんせん病が、はやりました。つぎからつぎへ、おおぜいの人がせきり〔ママ〕にかかりました。そのころ、高串には増田という名前のおまわりさんがおりました。増田さんはせきり〔ママ〕にかかった人々たちを、なんとかして、みんなたすけようと思っておられました。ほかの人は、だれでも、せきり〔ママ〕にかかった人を、きらって憎みましたが、増田さんは少しもそんなことはなく、やさしくかんびょうしたり、おみまいをしてやったりされました。そうしているうちに、増田さんに、せきり〔ママ〕がうつりました。するとりよかんの方は、うつるからといって、増田さんをきらい、ごはんなども、竹の先にのせてさしだしていたそうです。それでも、増田さんは、少しもおこらず、みんなのことを心配しておられたのですが、だんだんひどくなって、とうとう死んでしまわれたのです。そして、そのいよいよ死ぬというとき、増田さんは、高串の人たちに、「でんせん病のたねは、私がみんな持って行きますから、私が死んだあとからは、みなさんも、二どとおこさないように、よく気をつけてください」といわれたそうです。そして、それからは、高串では、でんせん病というでんせん病は、どんなものでも、はやらなくなったそうです。高串の人たちは、増田さんのえらさがはじめてわかり、そこで、お宮をたててまつってあげようということになり、りっぱなお宮をたてました。それが、高串にある増田神社です。それから何十年とすぎた、いまでも、よその町では、どんなにひどくはやって、高串では、でんせん病は、はやらないそうです。私はこの話を兄さんから聞いて、増田さんのやさしい心に、こころからかんしんしてしまいました。」(安本 1958)
- (53) 近年、ナショナリズムに対する歴史学的議論が盛んになされているが、そのような流れの中で、「記憶」というものに注目する研究が登場してきている。私見では、近代の記憶の問題は、確かにナショナリズムとは切り離せないが、それにとどまるものではないのではないかと考えている。この点に関しては、稿を改めて議論したい。

彼の死 -増田巡査の神格化-

(54) 私は今後、この問題に関して、まずは長崎原爆の死没者に注目しながら考えていこうと思う。

【参考文献】

- 阿部安成 1996 「伝染病予防の言説—近代転換期の国民国家・日本と衛生—」(『歴史学研究』No.686 1999年7月号) 青木書店
- アリエス, フィリップ 1983 「死と歴史—西欧中世から現代へ」(伊藤晃・成瀬駒男訳 原著 1975) みすず書房
- 井手以誠 1972 「佐賀県石炭史」 金華堂
- 内田守 1966 「巡查大明神全傳—増田巡查の人間像と献身的活動の記録」 増田精神顕彰会 (なお引用頁は第三版 1988 に拠った)
- , 1972 「珠を掘りつつ」 金龍堂書店
- , 1977 「[村の燈台] 体験記—公民館運動とコミュニティ造りの一体化を説く」(『西九州大学研究紀要』別刷) 西九州大学社会福祉研究室
- 大日方純夫 1993 「警察の社会史」 (岩波新書 271) 岩波書店
- 後藤道雄 1934 「迷信の犯罪打診」 東林書房
- 島常也 1926 「増田神社由来記」 増田神社奉賛会蔵 (三木 1951, 内田 1966, 田中丸 1994 にも所収)
- セール, ミッシェル 1987 「兄弟に囲まれての食事—ジョーカーの理論」(『パラジット—寄食者の論理』所収 及川馥訳 原著 1980) 法政大学出版局
- 平重道 1965 「大正・昭和の倫理思想—『日本精神論』の成立」(日本思想史研究会編『日本における倫理思想の展開』) 吉川弘文館
- 田中丸勝彦 1992 「嗚呼警神増田巡查—殉職英霊の祭祀と民間信仰」(『西郊民俗』第 141 号) 西郊民俗談話会
- 西村明 1998 「コレラにまつわる他者イメージ—日本の近代化における民俗宗教の位置をめぐる考察」(1998 年度修士学位論文)
- 古川政次郎 1928 「増田神社の由来—増田巡查の死」(『東松浦郡教育資料集』, 内田 1966 にも所収)
- 三木凡平 1951 「増田神社参拝記」(『佐賀警友』1951・8) 佐賀県警察本部
- 連修 1931 「嗚呼警神増田巡查—増田神社の由来」 佐賀県警察部
- 安本末子 1958 「にあんちゃん—十歳の少女の日記」 光文社
- 脇本平也 1997 「死の比較宗教学」(叢書現代の宗教 3) 岩波書店
- 「入野村郷土史の研究」 1929 伊藤直治編 田野高等尋常小学校
- 「郷土先覚者小伝—先覚者芳名録」 その 1~3, 1971~3 唐津郷土先覚者顕彰会
- 「熊本県大百科事典」 1982 熊本日日新聞社
- 「佐賀県教育史」第 5 巻 1992 佐賀県教育史編さん委員会編 佐賀県教育委員会
- 「佐賀県郷土教育資料集」 1935 佐賀県学務部学務課
- 「佐賀県警察史」 上 1975・下 1977 佐賀県警察史編さん委員会編 佐賀県警本部
- 「佐賀県の祭(新聞切抜)昭和 31 年~昭和 38 年」 1996 佐賀県立図書館相談室編
- 「日本新教育百年史」第 8 巻 九州・沖縄 1971 小原國芳編 玉川大学出版部

## His Death – the Deification of a Policeman Named Masuda

Akira NISHIMURA

In 1895, there was a cholera epidemic in Japan. Masuda Keitaro, a policeman, died of the epidemic as he instructed people about hygiene and nursing patients in Takakushi, Saga. He is said to have said, “I will take away the cholera of this area when I die.”

After he died, people in Takakushi considered Masuda a deity and made a monument in stone to him. Later, people regarded him as a god of disease, and worshippers praying for their recovery from illness increased in number. The monument became Masuda Shrine.

Early in the Showa era, people in police and education circles began admiring Masuda for his self-sacrificing behavior. A nationalistic thought movement, “Nihon-seishin ron” (the Japanese Spirit argument), was behind these admiring movements.

After the war, a doctor, Uchida Mamoru, interpreted Masuda’s behavior as philanthropy. The policy “Shinto Shirei” of GHQ lay behind this thought.

In this process of Masuda worship the acceptance of the death by the living changed from the second personal death “thy death” to the third personal death “his death”. It is possible to interpret Masuda worship by examining this shift.